

インド・ジャイプルで行われた国際大会を見て感じたこと

平成22年2月28日

長瀬 拓巳

(H21年度2次隊)

【要約】

国際大会を見て私は選手と試合運営について残念に思いました。当初は私が思っている大規模な国際大会だと思っていたのですが大会そのものは人数も少なく盛り上がりがない試合の数々でした。しかしその中で私は審判法を学び、審判長に感動し、インド柔道の悪い点理解しました。今回の大会で得たものは思ったほど少なくインドの残念な部分を多く目にしてしまいました。私自身がこの部分を変える事は出来ないのですが、どう先生方達に働きかけるべきかを考えさせられる機会にもなりました。

【本文】

ジャイプルで開催された柔道国際大会に行ってきました。今回の目的は、①インドの代表選手が国際大会の舞台でどのように活躍できるか、②国際免許を持っている審判を見て私自身も審判の行動や視点を学ぶこと、そして③新ルールにおける禁止技を把握することでした。しかし今回私がこの大会で学んだことはあまりにも少なく、大会そのものも前回見に行ったハリドワール全国大会に比べたら熱気や面白さに関しては劣るものでした。

国際大会は2月22日から2日間で行われ、初日は男子『-73：-81：-90：-100』、女子『-48：-52：-63』が試合を行いました。会場は国際大会という感じの作りにはなっていますが、試合場が2試合場あるのに1会場しか使わず、会場の中を鳩が何羽も飛んでいるという私が見てきた国際大会ではありえない光景でした。

試合には8カ国が参加していました。1カ国につき1階級1人が参加できるのですが、今回インド開催であるのでインドは各階級に2チーム出場することができるという形でした。試合進行はトーナメントではなくリーグ戦で行われましたが、選手データを知らないのか、組み合わせを意識して作られていなかったのか、初戦からインドチーム同士の戦いや強い選手同士の試合が始まり、最後の決勝戦になると盛り上がりが少なくなっていたことに気づきました。せっかくの国際大会なので前以って試合の運営や組み合わせ、段取りを行って欲しいと感じました。

試合に関してはインドがほとんど優勝するのかなと思っていましたが、ウズベキスタンとキルギスの柔道がとても強く、いくつかの階級では今のインド選手では勝てないという選手が数人いました。とくにキルギスからは日本の講道館に研修や練習に行っている選手・指導者が多く、試合などを見ていると組手や寝技に関してよく勉強しているなと思いました。インド選手はレスリングのような組手を行い寝技に関しては絞め技しかほとんど知らないという主に力に頼る選手が多いですが、ウズベキスタンやキルギスの選手は組手の大切さや寝技の重要性をしっかりと理解したうえで試合を行っているように見えました。

この違いは確実に指導者の教え方の違いだと思います。私の目から見てまだ組手に関してはどの国もあまり上手ではありませんでしたが、技に関してはウズベキスタンとキルギスの選手がかなり上手だったと思いました。

今大会の中で応援に来た各州の指導者と会話する機会が少々ありました。『講道館で柔道を勉強してきました』という話を各先生から多く耳にしましたが、指導法を聞いてみるといったい何を講道館で

学んできたのかという拍子抜けした答えが多く帰ってきました。オリジナルの指導法や技を作るのはとても重要ですが、まず基本的な柔道を覚えさせてから次の段階に進んでほしいと思いました。小さい時期に基本を少ししか練習せずに“試合で勝てばいい”という指導法をインドが行っている限り、世界の柔道の舞台に出ることは難しいと思います。しかしその中で同じ柔道隊員の井上隊員が約2週間行っていたハリヤナの先生と話した時はとても柔道のことをよく理解していると感じました。先生は『基本を知らないからインドは負けた。もっと足技などを鍛えるべきだ』と話されていて、私はこのような先生が他の先生達と話し合っってインド柔道の底上げを目指してほしいと思いました。

2日目の大会も前日と同じ大会進行で行われました。新ルールのおかげで多くの選手が組み合う柔道を行っておりとても柔道らしい試合を見ることができました。審判に関してはまったく問題はありませんでした。国際審判免許を持っているだけあって国内の審判とはまったく違いました。選手達も指導アピールなどの行為を行っていましたが柔道を知っている審判がほとんどだったのでフェアな試合を見ることができました。

今大会で私は1つの事件にびっくりしました。それは無差別階級の準勝戦で起きたのですが、インド選手とキルギスの選手と試合をしていて最後にインド選手が投げて勝ったのですが、そのインド選手の過剰なガッツポーズや相手のことを思いやらない表現の仕方に大会審判長が激怒し、その選手を反則負けにしてしまったのです。私はビックリした後日本の武道の精神（精力善用・自他共栄）が海外の指導者にしっかりと行きとどいていることを確認できてとてもうれしい気持ちになりました。審判長は英語で何を言っているのか解りませんでしたが、武道の精神（自分と相手は共に成長するものであり、試合で成長させてくれた相手に礼の心を持って試合に臨むものであり、試合場の中では特に相手に対する礼の心を保ち続けなければならない。柔道は一人ではできない。）などを説明してくれたのだと思います。

今回、試合そのものは見ている方が楽しめる試合ではありませんでしたが、新ルールの確認と審判法をこの大会の中で学ぶ事ができました。この新ルールに則って私は自分の生徒達に柔道を教えていこうと思いました。

以上